

AFC Forum

Agriculture, Forestry, Fisheries, Food Business and Consumers

11

2016

特集 私の革新、プラス1農業



AFCフォーラム 11

Agriculture, Forestry, Fisheries, Food Business and Consumers 2016

特集

私の革新、プラス1農業

3 地域特性に適応した技術と人材を活かす

鈴木 克己

生産面に特化した強みを磨き、地域をもけん引する葉ネギ生産者。その取り組みから、魅力ある農業経営のために必要なものとは何かを考える

7 国産パン用小麦に挑んだ機械化大規模農業

鈴木 源太郎

大区画ほ場を整備し土壌改良を続け、高性能機械を駆使して連作困難といわれた国産小麦を専作する大規模農業経営を実現した農業者に聞く

11 畜産経営の厳しさを生き抜くイノベーター

加茂 幹男

先端システムを駆使して高い生産性を実現している経営体をレポート。成功の裏には、業界でも未知とされる技術を探るチャレンジ精神があった

特別企画

15 平成28年度アグリフードEXPO輝く経営大賞(西日本エリア) ～駆け上がる地域農業の担い手たち～

株式会社 伊藤農園／和歌山県

情報戦略レポート

23 上半期景況はプラス値通年見通しは慎重 収益増に寄与する女性の農業経営参画

—2016年上半年期 農業景況調査—

経営紹介

経営紹介

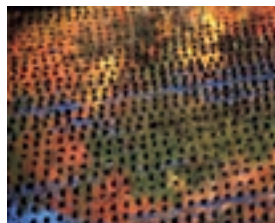
31 國分農場有限会社／福島県 國分 俊作

食品残さを独自発酵させる機械などを開発し、地域資源循環型の畜産経営を成功。東日本大震災による経営課題にも技術力を持って臨む

変革は人にあり

33 株式会社みどりや／山口県 藤井 照雄

天然記念物の「見島牛」を保存する体制づくりに寄与する一方、関係機関と長い交渉の末、去勢雄牛や人工交配での「見蘭牛」を生産、加工、販売する経営者に聞く



撮影：鎌形 久

岩手県宮古市

2006年10月31日撮影

田んぼに映る紅葉

■刈り取りの終わった田んぼに水が張られ、山々の色彩が映る。地力を上げる効果を期待する「ふゆみずたんぼ」により、来年の田植えの準備はすでに始まっている■

シリーズ・その他

観天望気

成長産業としての日本農業 榊原 英資 …… 2

農と食の邂逅

カメハメハ大農場の農家カフェ／福井県

藤井 和代

青山 浩子(文) 河野 千年(撮影) …… 19

耳よりな話 176

支援組織が支える耕畜連携 鈴木 一好 …… 22

書評

山田 優 石井 勇人 著

『亡国の密約 TPPはなぜ歪められたのか』

宇根 豊 …… 26

まちづくりむらづくり

地域資源を「つかう」「つくる」「つなぐ」

元気づくり原点は、菜の花プロジェクト

NPO法人愛のまちエコ倶楽部／滋賀県東近江市

増田 隆、三田 恵理子 …… 27

平成28年度第二次補正予算の概要 …… 30

インフォメーション

「静岡県農業経営アドバイザー連絡協議会」が発足

静岡支店 …… 36

「いわて食の大商談会2016」を開催 盛岡支店 …… 36

農業高校生の発想や実践力を養うプラン作成をサ

ポート 広島支店 …… 36

三事業が連携し、「わかやま産品商談会」を開催

和歌山支店 …… 36

みんなの広場・編集後記 …… 37

ご案内

第10回アグリフードEXPO大阪2017 …… 38

*本誌掲載文のうち、意見にわたる部分は、筆者個人の見解です。

望天 観気

成長産業としての日本農業

一九四七年、GHQの指揮の下、日本政府によっていわゆる農地改革が実行された。この改革によって地主制度は完全に崩壊し、戦後、日本の農村は自作農がほとんどになった。

GHQは日本国憲法の制定、施行とともに、戦争協力者の公職追放・財閥解体・農地改革などを主導したが、そのうち農地改革は最も成功した改革だといわれている。

確かに、戦前の小作制度はほぼ完全に廃止され、日本の農村は小規模な自作農中心の組織となり、それを農業協同組合が束ねることになった。一九五二年七月に成立した農地法は「耕作者中心主義」を掲げ、日本の農業は小規模な自作農中心の産業になった。

「民主化」ではあったのだが、自作農主義をあまりにも強調しすぎたため、逆に農地の集約が難しくなり、農地の所有権の移転などは原則として農業委員会の許可が必要となった。

「民主化」を軸とした戦後の農地法は、その後の日本経済の成長と新たな展開を踏まえて、二〇〇九年に、さらには二〇一六年に改正・施行されている。

改正法では農業関係者以外の農業参入を容易にし、農業の「六次産業化」などを目指すために農地所有適格法人における農業関係者以外の総議決権をかつての四分の一以下から二分の一未満に引き上げ、農業関係者以外の構成員要件を緩和したのだ。

ただ、その改正法でも自作農主義が撤廃されたわけではない。日本の農作物の質は極めて高いし、輸出のポテンシャルも高い。今なすべきことは農業の大規模化であり、そのための大企業の農業参入を基本的に自由化することであろう。

農業・漁業以外の産業のほとんどは大企業を中心とする企業群によって担われている。どうして農業や漁業だけが、いわば、社会主義システムを維持しなくてはならないのだろうか。製造業などと同様に農業・漁業従事者が企業の従業員になることは自然だし、また、そのことは彼らにとってもプラスになるだろう。

日本の農業の活性化のために必要なことは、間違いなく農業の資本主義化・企業化なのだろう。

青山学院大学 特別招聘教授

榊原 英資

さかきばら えいすけ

1941年生まれ。東京大学経済学部卒業。65年に大蔵省入省。入省後、ミシガン大学に留学し、経済学博士号取得。94年財政金融研究所所長、95年国際金融局長を経て、97年財務官就任。99年大蔵省退官後、慶応義塾大学教授、早稲田大学教授を経て、2010年より現職。近著に『幼児化する日本は内側から壊れる』（東洋経済新報社）、『資本主義の終焉、その先の世界』（水野和夫氏共著、詩想社）など。



移動販売車の農家カフェ
次は栄養や健康話をする
野菜の店舗を開いて
食べものが体をつくる
大切さを伝えたい

農と食
の邂逅

藤井 和代 さん

福井県あわら市
カメハメハ大農場の農家カフェ

医療関係から転身した保健師の資格を持つ妻と脱サラ借地農業の夫との二人三脚。「農業と健康な食生活は切り離せない」との信念で健康相談や食生活を提案する店舗づくりを目標に、さらに「プラス1農業」を目指す。





P19: 越前市出身の藤井和代さん。夫とともに45㎡の畑でトマト、スイカ、メロン、日本ハウレンソウなどを生産する P20:二人の息子の母さんでもある(右) 笑顔でお客さんに対応する。お客さんから「あなたの笑顔でパワーをもらえる」と言われるそう(左) カメハメハ大農場は「響きがよく、元気になれる」と夫の勇さん(右)が命名した(左下右) スムージー用に下準備した果物(左下左)

活動拠点は動く店舗

週末になると、JA花咲ふくいが運営する農産物直売所「きららの丘」の入り口に、「カメハメハ大農場農家カフェ」と書かれたバステルピンクの移動販売車がやってきて、店を構える。直売所で買い物を終えた人が「今日は何を飲もうかな」と近づくと、車の中から藤井和代さん(五一歳)がやさしい笑顔ののぞかせる。メロンのスムージーを注文し、一口含んだお客さんの笑顔がまたいい。「素材の味そのもの。おいしくてさっぱりしているね」

時期によってメニューや素材は変わるが、看板商品はなんとといっても和代さんが夫の勇さん(五三歳)と作るスイカやメロン、仲間農家が生産した梨などを使ったスムージーだ。事前に一口大にカットして凍らせておいた果物を販売車に持ち込み、注文を受けてから車内に設置するミキサーで仕上げる。

車を出動させるのは人出の多い土日と祝日を中心だ。「きららの丘」を拠点にしつつ、福井県内一円で行われる祭りやイベント会場に向いては店を開く。二〇〇九年からは多い日には一五〇人が訪れる人気ショップだ。

六次産業化で夫を応援

「作物を加工して販売しよう」と和代さんが考え始めたのは今から一〇年前のこと。

非農家出身の勇さんが高校の頃からやりたかったのは農業だった。農機具メーカーに勤務していたが、一大決心して脱サラ。借地農業を始めたのが一九九四年だ。砂地の土壌を活かし、トマト、スイカ、メロンなどの野菜生産を始めた。一方、保健師の資格を持ち、医療関係の仕事に就いていた和代さんは自身の仕事を続けた。

研究熱心な勇さんは、米ぬかや大豆かす、かに殻などで作った肥料などによる丈夫な土作りを心掛けていた。トマトは長期取りをせず、最もおいしい時期だけに収穫するなど妥協のないものづくりに専念。そのおいしさが個人客を中心に口コミで広がり、経営も軌道に乗るようになったが、収穫物が増えるほど規格外品も多くなる。

やがて和代さんは勇さんを応援したいと考えるようになった。勇さんたちの農地がある坂井北部丘陵地は県内でも農業が盛んな場所だ。現在のほ場から近い場所での規模拡大は難しく、「一緒に農業で生きていくとしても、私は生産ではなく、加工販売で関わるほうがいい」と思った。

あわら市内の専業農家の女性で作る組織「花野米レディース」に加わり、直売イベントに積極的に参加した。「あわらは温泉が有名ですが、活動に参加するまでこんな面白い農産物があるとは知らなかった。このことを消費者に伝えたいと思ったのも六次産業化を検討するきっかけになりました」

事業経営の経験がない和代さんは、創業セ

「ミナーに繰り返し参加し、「事業とは？ 経営とは？」など基本から学びながら、具体的な事業を練った。糸口を手練っていくと、移動販売という方法があることを知った。「人が多い場所にこっちから駆けつけられるし、車が走っていること自体がPRになる」と事業化を決心した。



農業女子プロジェクトのメンバーとしても活躍中(右) 樹上で完熟させたトマトから作るジュースやジャムはあわら温泉の女将さんたちが太鼓判を押している(左)

福井県の助成事業を一部活用し、約五〇〇万円で購入した移動販売車を購入。レストランのシェフでもある友人がメニュー開発に手を貸してくれた。周到な準備に加え、イベントがあれば積極的に駆けつける和代さんの行動力は見事に集客に結び付いた。事業開始時に立てた計画通り、五年間で開業時の借入金を無

事に完済した。

四年前から、農場のすぐ近くにあるあわら温泉の旅館と連携してギフト商品を開発し、販売に乗り出している。自慢のトマトや仲間の農産物を使ったジュース、ジャム、ソースをセットにしたギフト商品は人気で、一〇〇％完熟トマトジュースは温泉旅館などからの注文で売り切れてしまうほどだ。以前、仕出し店を経営していた和代さんの両親も加工品づくりに力を貸してくれる。今では勇さんの生産部門と、和代さんの加工販売部門はほぼ同じ売上高を計上するまでになった。

食べることの大切さを伝えたい

現在、移動販売を始めて八年目。次の一歩をどう踏み出そうかと和代さんは模索中だ。生果として売れる分を加工に回してまでやることなのか悩む一方で、実店舗を持ちたいという思いが和代さんにはある。移動販売車は水道がないため、仕込んでおいた材料を持ち込み、車では仕上げをするのみだ。その分、事前に全ての仕込みをしておかなければならない。水を使うことができれば、その場で新鮮な野菜や果物をカットして出すなどメニューがぐんと広がる。保健師としての経験を活かし、健康や栄養に関する相談を受けながら、その人にマッチした食生活をアドバイスできれば——。そんなカウンセリングができる店を構想中だ。

和代さんは二十歳代後半、青年海外協力隊の一員としてタンザニアに二年間滞在し、

栄養失調にあえぐ子供たちの栄養改善のための指導に携わった。滞在中、栄養のバランスが整った食生活を送るためには、その土台として農業がしっかりしていなければならぬこと、農業と健康的な食生活は互いにぴったりと寄り添っていることを実感した。

実は、勇さんも同じく協力隊員としてバングラデシュで稲作の技術指導に当たっていた。帰国後、福井県内で開かれたOB会が二人を結びつけた。勇さんが「農業をやる」と言った時、何の迷いもなく賛成したのもタンザニアでの体験があったことが大きかった。

多くの子供たちが栄養失調で苦しむタンザニアと飽食の日本。一見すると対照的に見えるが、「日本も栄養失調と無縁ではない」と和代さんは言う。痩せ願望が強すぎて栄養失調気味の若い女性が多いからだ。「結婚して丈夫な子どもを産むためにも、食べることで体をつくっていく大切さを伝えたい」——。和代さんが一段と目を輝かせて語った瞬間だった。

勇さんは「もう若くないし、移動販売のカフェもそこそこにしてあげば」と気遣う。一消費者として、健康に関する相談もでき、自分に合う食生活を提案してくれるオーナーシェフがいれば、どんなにうれしいことか。出会った人にすぐに心を開き、「うんうん」とうなずきながら耳を傾ける抜群の共感力を活かせる場所が和代さんにはふさわしいと思う。

(青山浩子／文 河野千年／撮影)



支援組織が支える耕畜連携

国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構

畜産研究部門 飼養管理技術研究領域長

鈴木 一好

戦

後、日本の農業は国民への食料供給を最大の目標に技術開発が進められました。畜産でもトウモロコシなどの安価な輸入飼料を用いた極めて効率的な畜産物の生産体系が確立され、家畜の飼養規模も拡大の一途をたどってきました。しかし、このような生産体系

が長期にわたり継続したことで、近年、飼料自給率の低下や家畜排せつ物による環境負荷など多くの弊害が顕在化し、輸入飼料へ過度に依存する畜産の現状を見直す動きがあります。草地やほ場で牧草、飼料用トウモロコシ、飼料用イネ、飼料用米などの自給飼料を生産、調製したものを家畜に給与して畜産物を生産し、家畜の排せつ物は堆肥などとして草地やほ場に戻すことで、耕畜連携による資源循環の環を再構築します。これにより、農産副産物、食品製造副産物などの低・未

利用の飼料資源も無駄なく活用でき、耕作放棄地などの有効利用にもつながります。

しかしながら、畜産農家では規模拡大や高齢化などにより労働力が不足しており、自らこれらに取り組むのは容易なことではありません。そのため、自給飼料生産などの作業を請け負うコントラクターやTMR (Total Mixed Rations: 混合飼料) を製造し畜産農家に供給するTMRセンターなど支援組織への期待が大きくなってきています。



TMRセンターでのTMRの製造

実際、コントラクターは、二〇〇三年の三二七組織から一五年には六三六組織へ、TMRセンターは、〇三年の三二カ所から一五年には二二九カ所へと大きく増加しています。

このような状況の中、支援組織向けの新技術が開発されています。例えば、イネWSCs (Whole Crop Silage: 発酵粗飼料) 用として「たちすずか」や「たちあやか」などの高糖分・高消化性品種が育成され、水田を活用した自給飼料生産に用いられています。そして、飼料用

イネの裏作に飼料用麦類を導入した飼料用稲麦二毛作体系では、地域に適した品種を用いるとともに堆肥や液肥を活用した栽培技術などの開発により、一〇^{kg}当たり一・八〜二・〇t以上の年間実乾物収量を確保できるようになりました。また、黒毛和種肥育牛向けに濃厚飼料の三〇% (乾物比) をカン

シヨ焼耐かす濃縮液で代替した発酵TMRの調製技術が開発されています。さらに、飼料用米をより低コストに貯蔵可能な破碎処理、乳酸菌添加、水分含量二七・五%以上の三つの条件を組み合わせた完熟期収穫飼料用米を対象としたサイレージ調製技術が開発されています。

畜産農家の飼料費などの生産コストの低減や競争力の強化のためにも、これら新技術を駆使した支援組織による耕畜連携推進への積極的関与に期待したいと思います。

Profile

すずき かずよし
1960年東京都生まれ。89年筑波大学大学院博士課程生物科学研究科修了後、NKK (日本鋼管株式会社) 入社。99年農林水産省畜産試験場入省、2014年から現職。理学博士。専門は家畜ふん尿の処理・資源化の研究。



『亡国の密約』

TPPはなぜ歪められたのか』

山田 優 石井 勇人 著



(新潮社・1,500円 税抜)

新しいスタイルの農政史

宇根 豊

(百姓・思想家)

一気に読み終えたが、百姓としては何度もため息をつかずにはおられなかった。外交としての農政の内実が、実によく分かった。二人の著者は口を合わせて、TPP交渉とガット・ウルグアイ・ラウンドはよく似ている、と言う。前者は昨年、後者は一九九三年に妥結した。

まずはスローガンが前者は「例外なき関税撤廃」、後者は「例外なき関税化」だ。結果は、前者が「聖域」を守るために、アメリカからの別枠の米の輸入を、後者は「関税化」を猶予してもらおう代わりにミニマムアクセス米の輸入(それも半分ほどはアメリカから)である。しかも両者とも途中で政権交代を挟んでいるが、政権が代わらなくても、同じ結論になっただろうという推測には、説得力がある。なぜか。

アメリカはひたすら経済的な実利を求めてくる

のに対して、日本は名分を重んじて、結局利益を損ねてしまうからである。

本書はこの二つの交渉の違いも明らかにしている。この二〇年間は日本の経済成長が完全に止まってしまった「失われた二〇年」だと言われている。TPPではアメリカに肩を並べようとする勢いが、もう日本にはなかった。

次に、ガットでは官僚が主導したのに、TPPでは官邸が主導した。農林族議員の凋落ちようらくぶりもTPPでは目に余るものがある。したがって本書は「失われた二〇年」の農政史でもある。

それにしても農政とは、何と百姓の実感の世界と遠いものかと感じた。この両者をつなぐ回路が、細ってきたことを痛感する。

そこで本書が、単にTPPへの反対・賛成を超えた次元で書かれている価値を考える。それは結果に一喜一憂するな、その先を考えろということだろう。そのためには、交渉の過程をしっかりと検証すべきだと著者らは言う。確かに交渉に参加する、しないを含めて多様な可能性がある中で、私たちに狭い世界しか見えていない。

経済成長を追うならば、経済のグローバル化は避けられないし、「聖域」など、いずれなくなるだろう。そうではない道を探ることを、百姓も「農業団体」もやってきたのだろうか。補償で償う「国内対策」では足りない。

最後に書名だが、誤解されそう。本書は暴露本ではない。情報開示が不完全な中で、丹念に情報と資料を集めて、真実に迫った労作である。



読まれています 三省堂書店農林水産省売店 (2016年9月1日~9月30日・税抜)

| タイトル | 著者 | 出版社 | 定価 |
|---------------------------------------|------------------------|-----------|--------|
| 1 鳥獣害 動物たちと、どう向きあうか | 祖田 修/著 | 岩波書店 | 820円 |
| 2 アメリカも批准できないTPP協定の内容は、こうだった! | 山田 正彦/著 | サイゾー | 1,500円 |
| 3 TPPが日本農業を強くする | 山下 一仁/著 | 日本経済新聞出版社 | 1,800円 |
| 4 平成28年版 食料・農業・農村白書 | 農林水産省/編 | 日経印刷 | 2,600円 |
| 5 農地を守るとはどういうことか 家族農業と農地制度 その過去・現在・未来 | 榎澤 能生/著 | 農山漁村文化協会 | 1,700円 |
| 6 ドキュメントTPP交渉 アジア経済覇権の行方 | 鯨岡 仁/著 | 東洋経済新報社 | 1,500円 |
| 7 外来種は本当に悪者か? 新しい野生 THE NEW WILD | フレッド・ピアス/著、 藤井 留美/訳 | 草思社 | 1,800円 |
| 8 本当は明るいコメ農業の未来 | 窪田 新之助/著 | イカロス出版 | 1,500円 |
| 9 悪夢の食卓 TPP批准・農協解体がもたらす未来 | 鈴木 宣弘/著 | KADOKAWA | 1,300円 |
| 10 日本農業の動き192 点検 食料自給力 | 農政ジャーナリストの会/編 | 農林統計協会 | 1,200円 |



地域資源を「つかう」「つくる」「つなぐ」 元気づくり原点は、菜の花プロジェクト

滋賀県東近江市

NPO法人愛のまちエコ倶楽部 事務局長

増田隆

事務局広報

三田 恵理子



地域の課題は地域で解決する

「菜の花プロジェクト」という言葉をご存じですか？これは、休耕田や転作地で菜の花を栽培し、収穫した菜種を搾って菜種油として販売する、また、使用済みの天ぷら油を回収してバイオディーゼル燃料に精製し、軽油の代替燃料としてトラックやトラクターなどに利用するという、資源循環と地域自立をテーマにした取り組みです。地球温暖化防止や食とエネルギーの地産地消、環境教育や観光の資源となり地域経済の好循環を生み出すなど、さまざまな波及効果があります。取り組みの柔軟性から現在、全国一五〇以上の団体に広がっています。

多くの人の共感を呼んでいるこの菜の花プロジェクトは、琵琶湖のせっけん運動を発端として一九九八年、琵琶湖の南東部に位置する愛東町において初めて取り組みました。廃食油を回収して粉せっけんを作る活動が住民によって始まり、

自治会・行政・団体が協力する資源回収の仕組み「あいとうりサイクルシステム」へと発展して、現在では毎月七品目一二種類の資源類の回収を住民主導で行っています。

そして、プロジェクトの基幹施設「あいとうエコプラザ菜の花館」の建設に伴って、住民主体の活動をより広めようと、二〇〇五年、愛東町（現在、東近江市愛東地区）で「NPO法人愛のまちエコ倶楽部」（以下、エコ倶楽部）が設立されました。

地域資源を循環させる菜の花プロジェクトは、地域の課題は地域で解決するという活動モデルです。この成果を活かし、さらに発展させようとエコ倶楽部では地域活性化を目指してさまざまな事業に取り組んでいます。地域の資源を活用してコミュニティ・ビジネスを創り出していくことが私たちの役割であると考えているからです。

地域の資源を探る中で農業の特徴を知っていくほどに、農家や農地、果樹などが地域にとってのかけがえのない財産であること、しかしながら

大きな問題を抱えていることを学びました。

愛東町の頃より、基幹産業は農業です。米を中心としながらもトマト、ネギ、サトイモ、茶など少量でさまざまな作物を生産しているのが特徴です。さらに、扇状地という土地柄からブドウ、ナシ、メロン、イチゴ、イチジクなどといった果樹栽培も盛んです。特に、ブドウとナシは約四〇年前から地域の特産品として栽培され、京都の市場でも名が通っています。県内有数の売り上げを誇る道の駅あいとうマーガレットステーションの直売館は地元産一〇〇％にこだわった品ぞろえで、いつ訪れても季節の野菜や果物が並んでいます。このように、しっかりとした販売ルートがあるのも地域の強みです。

一方で、農家は六〇〜八〇歳代の方が多く、この先の一〇年、二〇年後を考えたとき、後継者不足や耕作放棄地の増加が避けては通れない問題のように思われました。私たちは、豊富な農村資源を活用した取り組みを進めていくことが、地域

profile

増田 隆 ますだ たかし

1954年滋賀県東近江市(旧湖東町)生まれ。関西大学工学部卒業後、2005年エコ倶楽部設立時に理事、11年から現職。

三田 恵理子 みた えりこ

1988年大阪府堺市生まれ。滋賀県立大学環境科学部にてコミュニティビジネスなどを学ぶ。2014年エコ倶楽部に入社。農家民泊、菜種油の販売などに取り組んでいる。

NPO法人愛のまちエコ倶楽部

自然豊かな東近江市愛東地区で「地域のことは地域の中で解決しよう」「子供たちによりよい環境を贈ろう」という想いで地域住民が中心となり、2005年に設立。全国に先駆けて始まった地域内資源循環モデル「菜の花エコプロジェクト」を中心に、地域の環境を守り、食とエネルギーの地産地消を進めることで、より地域が元気になるという仕組みを作り、1人1人が知恵と力を出し合った活動を、田んぼ、山、果樹園など地域の全域で展開している。

知っていきなうから始めよう

を元気にするお手伝いになるのではないかと考えました。

「私たちがそうだったように、地域の農業を知ってもらえれば、外部の人も愛東のファンになってくれるのではないか。「愛東の農業を知ってもらうことから始めよう」。私たちは、そのような気持ちから農業体験の受け入れ「田舎もん体験」を始めました。

現在は米、茶、大豆栽培からのみそ作り、ブドウ、ナシのコースがあります。どのコースも一年を通して地域に通っていただき、土との触れ合いや農家の方との交流、農作物の成長と収穫を楽しんでもらうものです。米のコースは「一からの米

づくり」と名付けました。参加者は耕作放棄地などエコ倶楽部が借り入れた田んぼ(農業不使用)で一組当たり約八〇平方メートルを担当します。特徴は、名前の通り「一から米を作る」ことです。種子の温湯消毒から始まり、種まき、自宅での育苗、田植え、草取り、稲刈り、はさがけ、脱穀、粃すり、そしてわら細工まで年間を通して体験してもらっています。参加費は一区画当たり一万二〇〇〇円。自分で作った米二〇キログラムを持ち帰ってもらいます。先生は地域の農家の方です。春の田植えと秋の稲刈りの時には地域の方にお昼ご飯を用意してもらい、交流を図っています。

参加者の年間の作業日数は八日程度ですが、自主的に田んぼに訪れて草刈りをするなど手作業による米づくりに励んでいます。参加者からは

「お米を大事に食べるようになった」、地域の方からは「若い人がたくさん愛東に通ってくれて自分たちも元気をもらえる」という声をいただくようになりました。

さて参加者から、より本格的に米作りをしたいという要望が寄せられるようになったことから、田んぼ一枚まるごと作れる「農家みたいに米づくり」も始めました。参加費は一区画、初年度一〇万、二年目以降六万円です。最初「そんなん本当にする人があるんか?」という声もありましたが、今では毎年三区画全てが埋まる盛況ぶりです。私たちが驚いています。年間作業は先生である農家の方と相談してもらいます。田植え機、トラクター、コンバインなどはエコ倶楽部の物をスタッフの指導の下、使用してもらっています。



上:「お米ってこうやってできるんだ」と目を輝かせる「一からの米づくり」体験2年目の小学生。田んぼでは子供たちの成長に目を見張る
下:一面に広がる菜の花畑と、バイオディーゼル燃料で走る市内循環バス

茶、ブドウ、ナシのコースではそれぞれの園主が先生となり、年間の作業を体験します。

募集については、ホームページやリーフレットを近隣の市町村の図書館などに置いてもらって周知を図っていますが、最近では、リピーターになってくれる人や、参加者の口コミによって興味を持ってくれる人が増えています。

田舎もん体験から就農希望者

「田舎もん体験」体験者の中から、担い手のいなかった茶園の管理を行うようになった人や田んぼを借りて稲作を始めた人もいます。また、ナシの体験では、ナシ園のお手伝いから始めたのが、担い手のいないナシ園を参加メンバー共同で管理・運営するまでに発展させた人たちもいます。他にも愛東地区で就農したいといった相談が、エコ倶楽部に多く寄せられるようになりました。

このようなありがたい出来事を目の当たりにして、私たちはこれまでの経験やつながりを活かして、担い手が欲しい地域の農家と就農希望者のパイプ役を担うことができるのではないかと考えました。特にブドウやナシなどの果樹栽培は園を一年間放置するだけで使えなくなってしまうため、早期の担い手探しが必要でした。二〇一一年から就農希望者と地元農家やJA、県、市の間に入り、それぞれと連携しながら、新規就農支援を行っていきます。

間に入る上で大事にしていることは、農地だけでなく人をつなぐということです。就農希望者と何度も話をして、この地域でどんな農業を目指していくのかなどを細かく確認します。そして、就

農前の段階から引き継ぐ農地や農家の方だけでなく集落の方々と顔合わせを行うなど、信頼関係を築いた上で就農してもらおうにしています。手間も時間もかかりますが、就農するということは、地域に入る(移住する)ということでもありません。就農後もずっと暮らしていつてもらうために重要なことだと考えています。そのかいてもあって、現在までに五人の方が就農し、一〇組の移住支援をしています。今後は、定住に不可欠な住まいについて空き家の活用を図るなど、就農後のフォローにも力を入れていく予定です。

菜の花プロジェクトで菜の花を栽培していることから四月から五月の開花期になると、地域には菜の花で一面黄色の美しい風景が生まれます。写真愛好家などの観光客も多く地域に訪れますが、宿泊施設が充実していないこともあり、皆さん日帰りでした。「田舎もん体験」で来る参加者も同様に日帰りです。そこで、より地域の良さを知ってもらうためには、来てくれた人にもっとゆっくり滞在してもらう必要があるのではないかと私たちは考え始めました。そこで、地域の食の見直しと合わせて始めたのが農家民泊事業です。一九八八年、愛東町の女性職員が町名に「愛」を持つ北海道愛別町、神奈川県愛川町、長崎県愛野町にバレンタインデーのチョコレートを贈ったことがきっかけとなり、四町間で交流が行われていました。農家の方は交換留学として来た子供たちを宿泊させていたことから素地ができていたとも言えるでしょう。

準備期間を経て二〇一〇年に農家民泊事業がスタート。今までに五軒の農家民宿が開業し、教

育旅行や外国人の受け入れなど年間約三〇〇人が民泊で訪れています。さらに、二年前から地域の人が季節に合わせた見どころや名所を案内する「まち歩き」イベントや縁側カフェ「よききて茶屋」もスタートし、都市と農村の交流事業を進めています。「よききて茶屋」は、同じ集落の農家三軒が年五回、一日限定の茶屋を開くものです。いっぽく代は一人四〇〇円で、お客さんは「茶屋」のお母さんが入れてくれる地元のおいしいお茶と手作りのお茶うけ(お漬物があったり天ぷらだったり!)とお母さんのおしゃべりを楽しまれています。

まだまだ小規模ではありますが、都市との対等な交流により地域経済が潤うだけでなく、「自分の地域を見直した」「自信になる」と地域の方々が自信や誇りを再認識しつつあると実感しています。

琵琶湖の水質保全を原点に始まった私たちの取り組みは、環境やエネルギーだけでなく、食、農業、里山、森林、福祉など、幅広い分野の人々とつながり、地域の課題と向き合いながら地域全体を元気にする仕事にまで広がってきました。

取り組みを進める中で強く感じる必要があります。それは、地域の元気を生み出すためには、国による経済振興に期待しているだけではなく、地域の資源を「つかう」、地域に必要なサービスを「つくる」、そのために地域にあるものを「つなぐ」という地域からの自立的な取り組みが必要だということなのです。私たちは、その実践モデルとなることを目指して、今後さまざまな地域の課題に取り組んでいきます。

平成28年度第二次補正予算の概要

平成28年度第二次補正予算により、日本政策金融公庫農林水産事業では、以下の経済対策が措置されましたのでご案内します。

1 スーパーL資金の特例措置

TPPによる新たな国際環境の下で、新たに規模拡大や農産物輸出などの攻めの経営展開に、意欲的に取り組む農業者を支援することを目的にした制度です。

(平成27年度補正予算に続き、平成28年度第二次補正予算でも措置されたものです。)

(1) 実質無利子化措置 (融資枠1,000億円)

【ポイント①】

国からの利子助成により、貸付当初5年間が実質無利子(注)になる制度です。

【ポイント②】

次の全てを満たす方がご利用の対象になります。

- 人・農地プランの中心経営体として位置付けられた認定農業者または農地中間管理機構から農用地等を借り受けた認定農業者
- 新たに攻めの経営展開を行う計画を策定した方

(2) 実質無担保・無保証人貸付 (融資枠200億円)

【ポイント①】

担保については、原則として融資対象物件に限り、また、保証人については、原則として個人の場合は不要、法人の場合は必要に応じ代表者のみとする制度です。

【ポイント②】

次の全てを満たす方がご利用の対象になります。

- 実質無利子化措置の適用を受ける方
- 主として借り入れた資産により事業を行っているなどの理由で十分な担保提供ができない方
- 融資審査により、十分な事業性があることが確認された方

2 農林漁業セーフティネット資金の実質無利子化措置

経営規模拡大や輸出など、農林水産業の競争力強化に取り組む農業者が、世界経済の需要低迷や成長減速などによる影響で経営状況が悪化する懸念に備え、円滑な経営展開が図れるよう資金繰りを支援することを目的にした制度です。

(平成28年度第二次補正予算で初めて措置されたものです。)

実質無利子化措置 (融資枠100億円)

【ポイント①】

国からの利子助成により、貸付当初5年間が実質無利子(注)になる制度です。

【ポイント②】

次の全てを満たす方がご利用の対象になります。

- 農林漁業セーフティネット資金(社会的・経済的環境変化対応資金)の対象要件を満たすこと
- 人・農地プランの中心経営体として位置付けられた認定農業者または農地中間管理機構から農用地などを借り受けた認定農業者
- 次の①～③に掲げる条件のいずれかに該当すること
 - ① 自らまたは出荷先が農産物の輸出に取り組んでいること
 - ② 自らまたは出荷先が農産物を加工するとともに、その加工品の輸出に取り組んでいること
 - ③ 農産物およびその加工品の販売によって得た粗収益のうち、過半が実需者または消費者との直接取引によること
- 現在常時雇用している従事者の維持を図ること

(注) 利子助成率の上限は2%です。貸付金利が2%を超える場合、2%を超えた分は借入者の負担になります。

(留意事項)

*それぞれの特例措置の内容には融資枠があります。また、資金の使いみちによってはご利用いただけない場合があります。

*スーパーL資金および農林漁業セーフティネット資金の要件や本特例措置の対象者の要件などについて、詳しくは最寄りの支店(農林水産事業)までお問い合わせください。

「静岡県農業経営アドバイザー
— 連絡協議会」が発足

七月二五日、静岡市にて「静岡県農業経営アドバイザー連絡協議会」の設立総会を開催し、静岡県内で活動する農業経営アドバイザー四八人にご出席いただきました。

会長には中小企業診断士の清水進矢氏、副会長には静岡県信連の三浦博嗣氏を選任。協議会を通じてアドバイザーの認知度向上とコンサルティング活動の促進を図っていくことを確認しました。

総会に続いて行われたスキルアップ研修会では、融資における計画作成など農業経営者への支援事例について清水氏から紹介していただきました。

(静岡支店)



今後の活動方針を固めるアドバイザーたち

「いわて食の大商談会二〇一六」
を開催

八月二四日、岩手県庁、岩手県産株式会社、県内金融機関と「いわて食の大商談会二〇一六」を共催しました。県内の農業者や食品加工業者一〇二先が出展し、地域のこだわりの食材をアピールしました。

遠くは鹿児島県からなど、県内外から二〇七先四二一人のバイヤーが来場し、岩手県の食材に対する関心の高さがうかがえました。

バイヤーからは「良い食材を見つけることができた」などの前向きな声が聞かれ、岩手県産食材の取引拡大につながる商談会となりました。

(盛岡支店)



多くのバイヤーでにぎわう会場

農業高校生の発想や実践力を
養うプラン作成をサポート

八月三〇、三十一日に、広島県立農業高校六校二四人の生徒を対象に、日本公庫農林水産事業と国民生活事業の職員が講師となり農業経営に関する「ビジネスプランの作成」をテーマとした授業を行いました。

将来の夢や起業など、目標の実現に向けた実践力を培ってもらうことを狙いとしており、生徒は農業の現状や六次産業化への取り組み事例を熱心に学習後、特産物作りなどのプランを練りました。

高校生はプランを学校に持ち帰り、精度を高め、日本公庫主催の第四回「高校生ビジネスプラン・グランプリ」へ応募しました。

(広島支店)



グループごとに指導を受けプランを練る高校生

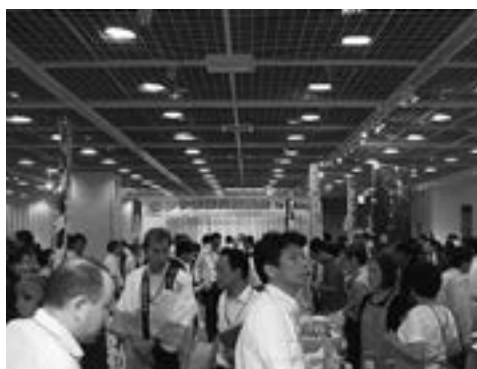
三事業が連携し、「わかやま
産品商談会」を開催

九月一四日、魅力ある商品を生産加工している県内農業者および食品加工業者とバイヤーとの商談の場を提供する「わかやま産品商談会in和歌山」を県などと共催しました。

一三回目の今年は、公庫のお客さま一六社を含む七二社にご参加いただきました。なお初参加は二二社でした。果実加工品の他、地元産の農産物を使用した入浴剤や紅茶など画期的な商品も出展されました。

出展者からは「意中のバイヤーから新商品に高い評価を得た」「今年の実績を基に、さらに大きな商談会に挑みたい」などの熱い声寄せられました。

(和歌山支店)



年々盛会となる商談会

みんなの広場

本誌九月号の感想を掲載します。

◆野本良平さんの「究極の鮮度を極めた魚を売る羽田市場」を拝読して、非常に感服しました。

特に、野本さんが最後に書かれた「補助金や交付金で何かするようない時々のぎではなく、『地方の人が自分で稼げるようになる道筋をつくる』ことが地方創生にとって一番重要なことだと考えている」との一文は、その通りだと思いました。

常に自助努力と創意工夫を忘れずに、水産業においても再生産が可能ないように資源管理を徹底し、流通を改善することが必要だと考えています。(長崎県平戸市 染川 勝英)
◆「経営紹介」に登場していた日光水産株式会社、カツオ一本釣り漁の伝統を守りながら飲食店を展開するなど市場を広げる取り組みに敬意を表します。

私は日本の近海でまき網漁業を営んでいます。資源問題や魚価低迷、後継者問題など数多くの問題を抱えて厳しい業界環境の中、特に資源に配慮し、国からの指導に対して積極的に取り組んでいるところです。

具体的にはサバーク制度(個別割当)の実証やクロマグロ資源の国際的問題などに業界挙げて対応しており、資源の枯渇は漁業者にとって死活問題であることは同業者で共

有し、認識しています。

しかし近年、外国の大型漁船などによる海外のまき網の操業は、資源収奪など国際会議で問題になることもあります。

私たちのまき網漁業は、カツオ、マグロ、イワシなどを対象に操業していますが、船内で凍結することは少なく、常に生の状態で水揚げします。近年、漁船の近代化が進んだことや、乗組員の鮮度に対する意識向上が図られ、鮮度の良い高品質な「さかな」を供給することができ、流通業界から高い評価を得ています。私たちは消費者に良質で安全安心な「さかな」を食べていただきたく、日夜努力しており、まき網漁業にもいろいろな形態があることを理解してほしいと思います。

(静岡県沼津市 長島 孝好)

みんなの広場へのご意見募集

本誌への感想や農林漁業の発展に向けたご意見などを同封の読者アンケートにお寄せください。「みんなの広場」に掲載します。200字程度ですが、誌面の都合上、編集させていただくことがあります。

「郵送およびFAX先」

〒00000000

東京都千代田区大手町一丁目一四

大手町フィナンシャルシティノースタワー

日本政策金融公庫 農林水産事業本部

AFCフォーラム編集部

FAX 03-3133-7011

編集後記

④ 台風や大雨の被害に遭われた方に対し、心よりお見舞い申し上げます。さて今号特集では、農畜産物生産過程に際立った特徴を持つ経営者の方々を取り上げました。皆さま、先進技術の導入に貪欲で、つくられた仕組みは論理的で整合性が取れています。良質のものを効率的かつ安定的に生み出す技術、ここに農業再興の本質を感じます。(嶋貫)

④ 街歩きで小さなパン屋さんを見つけると、お薦めを買って帰ります。パンの原料は小麦。でも、小麦を生産している方まで考えが及ばなかった私は、鈴村先生がご紹介した勝部さんの「ゆめちから」生産への想いに深い感銘を覚えました。それは、父徳太郎さんの「一鍬すつ大地に刻み続ける美しきものの創造」そのもの。農業って哲学のよう。(小形)

④ 先般、収穫の秋を満喫しようとサツマイモとラッカセイ掘りを体験してきました。農家さんからやり方を教えてもらい、収穫したのですが、自分で掘ったサツマイモとラッカセイはなんともいとおしい。まちづくりむらづくりの田舎もん体験「二からの米づくり」で種子の温湯消毒からお米を作った方の感動はいかほどなのかと想像します。(城間)

④ 子どもの頃から飲んでいるミカンジュース。歳を重ねて物の良しあしが分かるようになり、少し高価でもおいしく品質の良いものを選んで購入するようになりました。しかし、伊藤農園のジュースが出来るまでの伊藤さんのたゆまぬ努力と研究の軌跡を知り、一本に込められた作り手の想いも一緒にいただかなければと痛感しました。(上原)

AFCフォーラム

編集

浩一郎 嶋貫 伸二 清村 真仁
飯田 晋平 小形 正枝 城間 綾子
上原 理恵子

編集協力

青木 宏高 牧野 義司

発行

(株)日本政策金融公庫 農林水産事業本部
Tel. 03(3270)2268
Fax. 03(3270)2350
E-mail anjoho@jfc.go.jp
ホームページ <https://www.jfc.go.jp/>

印刷 凸版印刷株式会社

販売

株式会社日本食糧新聞社
〒105-0003 東京都港区西新橋2-21-2
第一南桜ビル
Tel. 03(3432)2927
Fax. 03(3578)9432
ホームページ
<http://info.nissyoku.co.jp/koudoku/>
お問い合わせフォーム
http://info.nissyoku.co.jp/modules/form_mail/

定価 514円(税込)

④ ご意見、ご提案をお待ちしております。

④ 巻末の児童画は全国土地改良事業団体連合会主催の「ふるさとの田んぼと水」子ども絵画展の入賞作品です。

第10回記念 つなげよう6次化の輪



第10回 **アグリフード EXPO** 大阪 2017
プロ農業者たちの国産農産物・展示商談会

日時 2月22^水日 / 23^木日
10:00~17:00 10:00~16:00

主催 JFC 日本政策金融公庫

会場 ATC アジア太平洋トレードセンター

